

猪ノ鼻(1)遺跡について

猪ノ鼻(1)遺跡の概要

青森県埋蔵文化財調査センターでは、一般国道45号天間林道路建設事業の実施に先立ち、猪ノ鼻(1)遺跡の発掘調査を実施しています。発掘調査は、昨年度に2ヶ月間行い、今年度は4月23日から10月31日までの予定で実施しています。

遺跡は、東北新幹線七戸十和田駅から北東約4.4kmの地点にあり、小川原湖に注ぐ坪川つぼの中流域、標高約19～20mの台地縁辺に立地しています。

調査の結果、縄文時代・古墳時代・奈良時代・平安時代・鎌倉～室町時代・江戸時代の遺構や遺物がたくさん見つかっています。

猪ノ鼻(1)遺跡で見つかった遺構・遺物

遺構は、縄文時代の落とし穴27基、竪穴住居跡17棟、土器埋設遺構1基、縄文時代～平安時代の土坑約40基、古墳時代の土坑墓6基、奈良時代の竪穴住居跡2棟、平安時代の竪穴住居跡29棟、鎌倉～室町時代以降の溝跡2条、カマド状遺構2基、江戸時代の掘立柱建物跡2棟、井戸跡1基、これらのほか、平安～江戸時代の柱穴約600基などがみつかっています。

遺物は、縄文時代の土器・石器・土製品・石製品、古墳時代の続縄文土器ぞく・古式土器こしき・鉄製品てつせい・玉たま・剥片はくぺん、奈良～平安時代の土師器はじき・須恵器すえき・土製品・鉄製品・木器はくち・羽口はぐち・鉄滓てつさい、江戸時代の陶磁器・銭貨などがダンボール箱で90箱出土しています。

猪ノ鼻(1)遺跡のうつりかわり

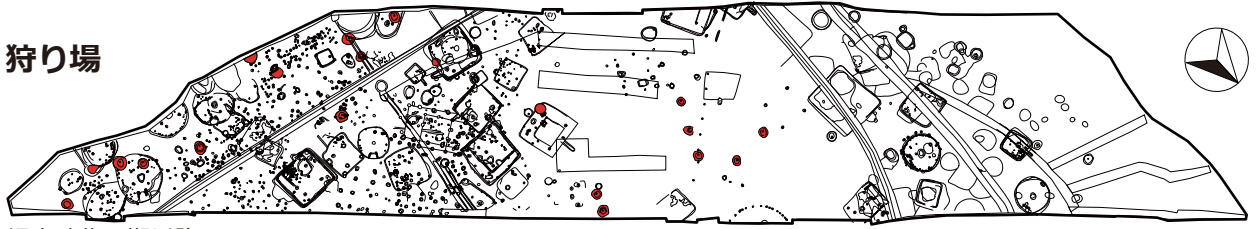
これらの遺構や遺物より、縄文時代早期以降の猪ノ鼻(1)遺跡は、獲物をとるためのワナ(落とし穴)がたくさん仕掛けられた場所だったことが分かりました。

また、約3,500年前(縄文時代後期中～後葉)になると、人々が住む生活の場(ムラ)に変わり、約1,700年前(古墳時代前期)になると、亡くなった人を埋葬する墓地になっていたことも分かりました。

そして約1,300年前(奈良時代)には、竪穴住居がわずかに建ち、約1,100年前～約1,000年前(平安時代)になると、再び人々が住むムラになって、約200年前(江戸時代)には、数棟の頑丈な建物が建っていました。

猪ノ鼻(1)遺跡は、いろいろな時代のいろいろな人々に利用された場所でした。ここには「いくつもの昔」、「いくつもの風景」、「いくつものドラマ」…があったのです。

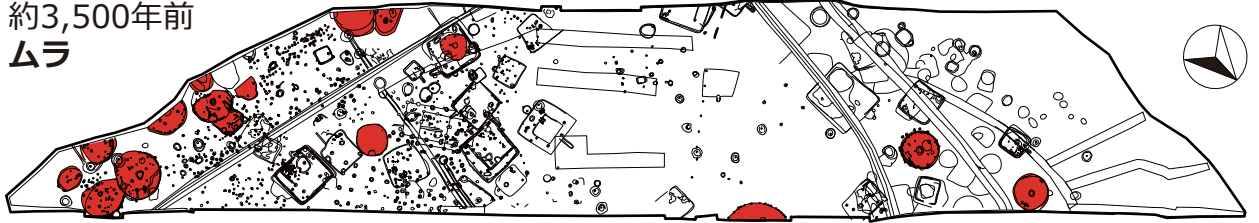
狩り場



縄文時代早期以降



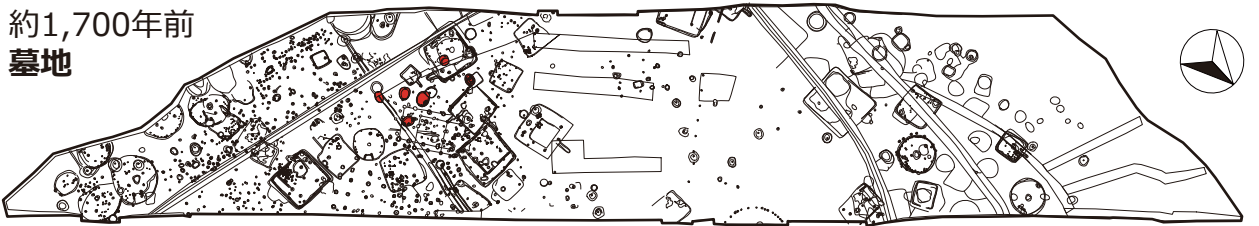
約3,500年前 ムラ



縄文時代後期中～後葉



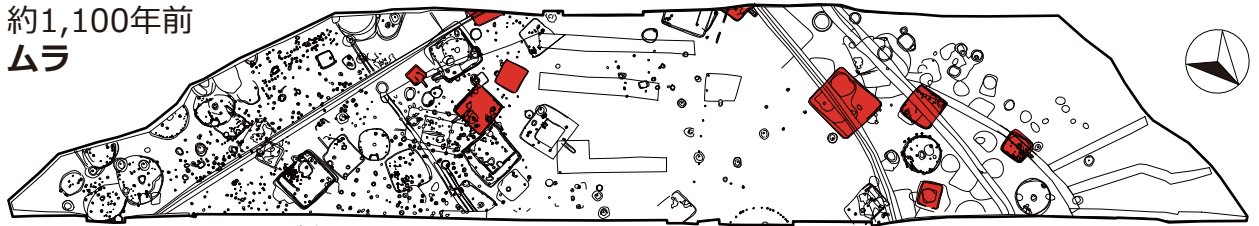
約1,700年前 墓地



古墳時代前期



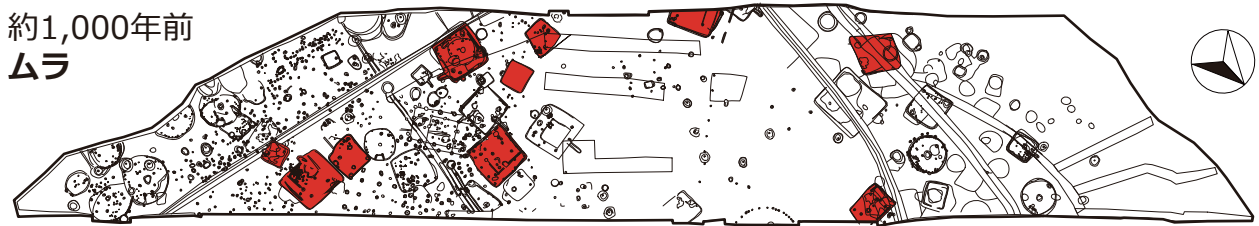
約1,100年前 ムラ



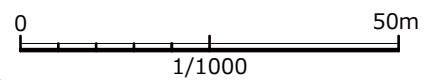
平安時代(十和田a火山灰が降る前)



約1,000年前 ムラ



平安時代(十和田a火山灰が降った後)



猪ノ鼻(1)遺跡のうつりかわり

縄文時代の猪ノ鼻(1)遺跡

早期以降の狩り場

後期中～後葉（約3,500年前）のムラ

【遺構】

縄文時代早期以降 円形の土坑が現在までに25基確認されています。底面に小さな穴をもつものが確認されており、そこに尖った杭（逆茂木^{さかもぎ}）を立てた落とし穴と考えられます。

縄文時代後期中葉～後葉（約3,500年前） 竪穴住居跡が17棟確認されています。竪穴住居跡は円形あるいは楕円形を呈しています。床面のほぼ中央に、地面で直接火を焚いた痕（地床炉）が確認されています。炉を囲むように支柱穴（屋根を支える柱の痕）が方形に配置されるものや、支柱穴が確認されず、壁際に小さな穴（壁柱穴）が巡るものが確認されています。中には床面の一部を一段高く削り残した段状の部分が確認されています（第11・23・29・52号竪穴住居跡等）。2個一対の小さな穴や外側に沿うように溝が付属するものもあり、出入口に関連する施設であったと考えられます。



円形の落とし穴
(縄文時代早期以降)



竪穴住居跡
(縄文時代後期中～後葉)

【遺物】

○ **土器** 大きく2つの時期の土器が出土しています。

早期中葉（約8,500年前） 底部が尖り（尖底土器）、表面の文様は貝殻などでつけられています（貝殻・沈線文系土器）。

後期中葉～後葉（約3,500年前） 深鉢・浅鉢・壺・注口・片口・香炉などが出土しています。5単位の大ぶりの波状口縁、口唇部につく刻み、同じ縄をつかった羽状縄文、沈線文などを特徴としています。また、壺・注口土器には器面が赤く塗られた（赤彩）土器も確認されています。

○ 石器

石鏃^{せきぞく}・石匙^{せつび}・石錐^{せきすい}・石篋^{いしべら}・敲石^{たたきいし}・磨石^{すりいし}・磨製石斧^{ませいせきふ}・石錘^{せきすい}などが出土しています。

縄文時代早期に特徴的な三角柱状の磨石や石の両端部を打ち欠いて、網漁のおもりにした石器（石錘^{せきすい}）が出土しています。また、縄文時代後期中～後葉の竪穴住居跡の覆土（埋^{ふくど}まった土）の中からは、黒曜石の剥片^{はくへん}（石器を作ったときに生じる細かな石の破片）がたくさん出土しています。黒曜石は、産地が限られているので、その成分を分析することにより、どこから持ち込まれたのかが明らかになります。

○ 土製品

スタンプ形の土製品が10点出土しています。印面に渦巻き状の沈線が施されたものや風車形を呈するものなどが出土しています。

○ 石製品

緑色凝灰岩製と思われる石刀の一部が出土しています。柄部分にはなにかを巻き付けたような痕があり、分析等によりその成分が明らかになるかもしれません。



第 29 号竪穴住居跡遺物出土状況
(縄文時代後期中葉)



スタンプ形土製品出土状況
(縄文時代後期中葉)



注口土器出土状況
(縄文時代後期中～後葉)



香炉形土器出土状況
(縄文時代後期中葉)

古墳時代の猪ノ鼻(1)遺跡

北の続縄文文化の要素

南の古墳文化の要素

古墳時代の日本－古墳文化と続縄文文化－

前方後円墳などの古墳がたくさんつくられた3世紀後半から6世紀末頃までを古墳時代と呼びます。しかし、前方後円墳がつくられた地域は、九州南部から東北南部までで、東北北部と北海道は、前方後円墳がつくられない地域(ヤマト政権の力が及ばない範囲)でした。つまり、東北北部と北海道は、「古墳文化」の圏外だったのです。

この頃、北日本には「古墳文化」とは異なる文化がありました。「^{そく}続縄文文化」です。「続縄文文化」とは、弥生時代になっても稲作を行わず、縄文文化のように漁労・狩猟などを基盤にした文化で、その中心地は北海道でした。

古墳時代の猪ノ鼻(1)遺跡

古墳時代、猪ノ鼻(1)遺跡は「墓地」でした。みつかったお墓は全部で6基で、時期は古墳時代前期(3世紀後半から4世紀：約1,700年前)と考えられます。これらはいずれも地面を楕円形に掘り下げた「土坑墓」と呼ばれる墓穴ですが、続縄文文化に特有な「柱穴状ピット」が伴うものと、それが伴わない単純なものの2種類あることが分かりました。

「柱穴状ピット」が伴うお墓は4基で、中からは、続縄文土器(後北C2・D式の注口土器・^{こほく}小型深鉢・^{ちゅうこう}小型台付鉢など)や、古式土師器(二重口縁壺)・^{とうす}鉄製品(刀子など)・玉(ガラス製)などが出土しました。「柱穴状ピット」が伴わないお墓は2基みつき、古式土師器(高坏・鉢など)や玉(^{へきぎよく}碧玉製管玉・^{くだたま}緑色凝灰岩製管玉・^{うもれぎ}埋木製もしくは^{へきぎよく}碧玉製棗玉・^{なつめだま}コハク製丸玉)などが出土しました。これら6基のお墓を全体で見わたすと、北の続縄文文化の要素(柱穴状ピット・続縄文土器)と南の古墳文化の要素(古式土師器・鉄製品・玉類)が複雑に入り交じっていることが分かります。

東北北部における古墳時代の発掘例はとても少なく、当時の人々の社会については、分からないことばかりです。今回のこの発見は、続縄文文化系の人々と古墳文化系の人々がどのような関係にあったのか、この猪ノ鼻(1)遺跡でどのような“出会い”があったのかなど、様々なことを考える上でとても重要です。今後は、1993年に国立歴史民俗博物館が調査を行った森ヶ沢遺跡(猪ノ鼻(1)遺跡の西方約1.5Kmの地点にあり[表紙の地図参照]：5世紀中葉の続縄文文化の土坑墓で著名)との比較検討も重要課題になります。



第7号土坑〔土坑墓〕完掘
(2個一対の柱穴状ピットが伴っています)



第47号土坑〔土坑墓〕続縄文土器出土状況
(古墳時代前期：後北C2・D式)



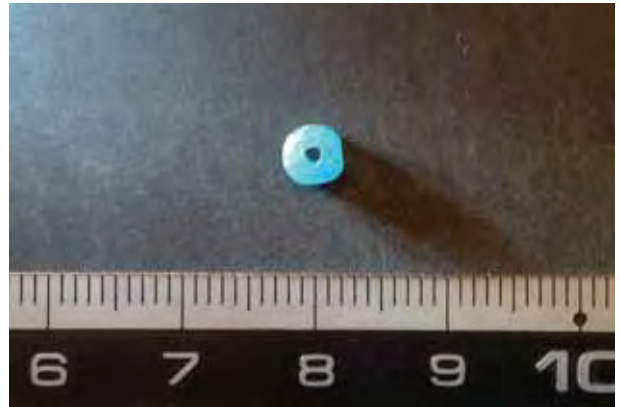
第4号土坑〔土坑墓〕古式土師器・玉類出土状況
(柱穴状ピットは伴っていません)



古式土師器 (古墳時代前期：第4号土坑〔土坑墓〕と
第55号土坑〔土坑墓〕から出土した破片が接合)



鉄製品 (刀子)
(古墳時代前期：第7号土坑〔土坑墓〕出土)



ガラス玉
(古墳時代前期：第7号土坑〔土坑墓〕出土)



各種玉類 (古墳時代前期：第4号土坑〔土坑墓〕出土)

平安時代の猪ノ鼻(1)遺跡

第Ⅰ期のムラ 9世紀後半

第Ⅱ期のムラ 10世紀後半～11世紀前葉

平安時代の猪ノ鼻(1)遺跡は、ムラでした。竪穴住居跡が29棟、土坑が10基みつかっており、調査区の平坦部に分布しています。これらは火山灰の堆積状況や出土遺物から大きく2つの時期に分けることができ、平安時代にムラが2回つくられていたことがわかりました。

第Ⅰ期のムラは、十和田a火山灰が降る前(9世紀後半：約1,100年前)に、第Ⅱ期のムラは、十和田a火山灰が降った後(10世紀後半～11世紀前葉：約1,000年前)につくられました。

【第Ⅰ期のムラ】(約1,100年前)

竪穴住居跡が11棟確認されました。住居を覆った土の中には、十和田a火山灰(915年降下)が厚く堆積しており、その少し上には白頭山はくとうさん-苦小牧火山灰(946年降下)が薄く堆積しています。住居の平面形は方形で、北側の壁にはカマドが付きます。カマドの煙を屋外に出すための煙道は、地下式で長いものが多くみられます。また、炭化材が出土する住居が多く確認されました(第7・41・46・47号竪穴住居跡等)。この炭化材は柱や屋根の垂木、梁などの建材と想定され、第41号竪穴住居跡からは、柱が立った状態で出土したほか、屋根に葺いたとみられるカヤもみつかりました。これらの住居は火災に遭ったか、廃絶時に意図的に燃やしたものと考えられます。



住居内に堆積した火山灰 (白い火山灰は十和田a火山灰、その上の黄色い火山灰は白頭山-苦小牧火山灰)



第7号竪穴住居跡 炭化材出土状況

遺物は竪穴住居跡や土坑はじき すえきから土師器や須恵器、土製品、鉄製品が出土しました。

土師器の甕の中には、上半部を口ク口で、下半部を叩いて成形したのがあります。また、須恵器の坏や甕は青森県内の須恵器窯(五所川原須恵器窯跡)で焼かれたものとは異なる特徴をもっています。

土製品では糸をつむぐ際に使用した紡錘車^{ぼうすいしゃ}や玉、鉄製品では鉄鏃^{てつぞく}や刀子^{とうす}、鉄斧^{てつぷ}などが出土しました。



第 32 号 豎穴住居跡 須恵器坏出土状況



第 7 号 豎穴住居跡 刀子出土状況

【第Ⅱ期のムラ】(約1,000年前)

豎穴住居跡が15棟確認されました。カマドは住居の南壁もしくは東壁に付き、鉄づくりで使用する土製の送風管である羽口^{はぐち}に粘土を貼り付けて構築するという特徴がみられます。煙道は半地下式で短いタイプです。



第 8 号 豎穴住居跡 カマド



第 52 号 土坑 炭化木製品出土状況

遺物は土師器や須恵器、木製品、鉄製品のほか、羽口^{はぐち}や鉄滓^{てつさい}(鉄づくりの際に生じる滓^{かす})が出土しました。羽口の中には長さ30cmを超える大型品があり、製鉄炉で使用されたものとみられます。鉄づくりに関係する遺構は見つかっていませんが、近くに鉄や鉄製品を作っていた場所があると考えられます。また、第52号土坑からは炭化した木製の椀もしくは皿が数点重なって出土しました。

十和田 a 火山灰 (To-a) 915 年の十和田火山の噴火によって降り積もった白っぽい火山灰。

白頭山ー苫小牧火山灰 (B-Tm) 946 年の白頭山(中国と北朝鮮の国境に位置する火山)の噴火によって降り積もった黄色っぽい火山灰。北海道の苫小牧市で初めて見つかった。

丸い住居と四角い住居

遺跡調査の花形と言えば、地面を掘り込んで作られた「竪穴住居跡」！

七戸町二ツ森貝塚などの縄文時代の遺跡では、茅葺き^{かやぶ}の竪穴住居が復元されています。

縄文時代の住居のイメージが強い竪穴住居跡ですが、寒冷な東北地方では平安時代にも多くの人が、竪穴住居跡に暮らしていました。

縄文時代の比較的早い段階には四角形の竪穴住居跡も多かったのですが、後半になると楕円形や円形のものが多くを占めました。

当遺跡でも、約3,500年前の縄文時代後期の円形床の竪穴住居跡、その約2,500年後の平安時代の四角形床の竪穴住居跡が見つかっています。

当遺跡の縄文時代の竪穴住居跡では、壁際に細い柱の跡がたくさん見つかっています。これは壁構造を示すもので、床の形と同じく、上面から見て円形の壁が立ち上がっていたと考えられます。一方、平安時代の壁際には、壁の崩落を防ぐ「腰板」が立っていたことから、これも床と同じく四角形の壁が立ち上がっていました。

縄文時代のものは中央に円形の炉、平安時代には一方向の壁に「カマド」と呼ばれる煙突付きの火を焚く施設が作られています。これには調理や暖房、照明の役割もあったようです。

縄文時代後半の竪穴住居跡で多くの場合、円形の床構造が採用されているのは、家族が炉のほうを向いて過ごしたからでしょうか。

古墳時代以降、平安時代に至るまで、カマドが作られるようになると、円形の床構造に戻ることはありませんでした。カマド横のスペースを利用しやすいからでしょうか、直線状の壁である四角形の床構造が採用され続けました。

もちろん竪穴住居跡の床面の形は、炉とカマドの要因だけでは無く、住居上部の構造や用途、当時の人々の意識にもよるのですが、発掘では良く分からないことも多いのです。

縄文時代の貯蔵用の穴、落とし穴、お墓などの穴もほとんどが円形や楕円形のもので、技術的には当然可能であった四角形の穴をほとんど掘らなかったのは、縄文人の無意識の中に潜んだ伝統と言えるかもしれません。縄文時代後期の環状列石(ストーンサークル)や各施設が円形に配された村である環状集落の存在からも、その様な気がしてなりません。



猪ノ鼻(1)遺跡の丸い住居と四角い住居

○縄文土器

約15,000年前に誕生した縄文土器は、粘土紐を輪積みにして重ねた輪積み成形によって作られました。土器は製作された時期や地域によって異なる特徴を示します。縄文時代草創期から中期までは器形のバリエーションは少なく、深鉢形が多く使用されました。外面には沈線や縄によって文様が施されています。猪ノ鼻(1)遺跡からは約8,500年前の縄文時代早期の土器と約3500年前の縄文時代後期(中葉～後葉)の土器が多く出土しています。

縄文時代早期には、底が尖った土器(尖底深鉢形土器)が作られました。尖底のため土器自体では安定せず、石で支えたり穴を掘ったりして使用していたと想定されます。内面や外面は貝殻の縁を使った器面調整や文様がつけられています。

縄文時代後期になると深鉢形に加え、浅鉢、壺、注口土器、香炉形土器、片口等、バリエーションが豊富になります。土器の内外面は丁寧に磨かれ、工芸品の様に綺麗な土器が製作されました。文様は沈線で区画した中に縄を転がしたり、意図的に縄文を消す「磨消し縄文」という手法を用いて施文されています。

はじき
○土師器

猪ノ鼻(1)遺跡では奈良時代、平安時代の生活痕跡もみつかりました。縄文土器同様に素焼きの土器である土師器が主に使われました。縄文時代から続いた外面に文様を施す伝統はほぼ無くなります。土師器は輪積み成形の他にロクロを用いて作成されるものもあります。外面にはロクロ痕やケズリ・ナデ等の器面を整えた痕が見られます。中にはミガキによる装飾効果が見られるものもあります。器種は甕・坏・鍋・甑・壺等がみられています。

土師器の他に、専用の窯で焼かれた硬質の焼き物である須恵器も使用されました。須恵器の製作技術は5世紀に朝鮮半島から伝わり、日本各地で窯が作られました。青森県では五所川原市で日本最北の須恵器窯跡がみつかり、北は北海道の天塩町にまで流通しています。



縄文時代早期の土器



縄文時代後期(後葉)の土器



平安時代の土器(土師器)



平安時代の土器(須恵器)

年 表

年代	時代・時期	県内の代表的な遺跡	主な土器・石器など	県内の主なことから
約30,000年前	後期旧石器時代	安部（東通村） 田向冷水（八戸市） 大平山元Ⅱ・Ⅲ（外ヶ浜町） 五川目(6)（三沢市）	ナイフ形石器 槍先形尖頭器 細石刃	針葉樹林帯における狩猟・採集生活 氷河期の終焉
約13,000年前	草創期	長者久保（東北町） 大平山元Ⅰ（外ヶ浜町） 表館(1)（六ヶ所村） 黄檗（八戸市） 櫛引（八戸市）	局部磨製石斧 無文土器 隆起線文系土器 爪形文系土器 多縄文系土器	土器づくりが始まる（最古の土器） 弓矢による狩猟の発達 落葉広葉樹林帯の形成 定住生活
約9,000年前	縄 早 期	日計（八戸市） 長谷川（つがる市） 猪ノ鼻(1)遺跡 根井沼（三沢市） 赤御堂（八戸市）	押型文系土器 沈線・貝殻文系土器 条痕文系土器 縄文系土器	縄文海進の始まり 貝塚の出現、尖底土器の使用
約6,000年前	文 前 期	後平(4)（七戸町） 早稲田(1)貝塚（三沢市） 畑内（八戸市） 古野(2)（風間浦村） 家ノ上（六ヶ所村）	長七谷地Ⅲ群土器 円筒下層 a 式土器 円筒下層 b 式土器 円筒下層 c 式土器 円筒下層 d 式土器	円筒土器文化の始まり 大規模集落の形成と大量の土器
約5,000年前	時 中 期	三内丸山（青森市） 平畑(3)（三沢市） 水上(2)（西目屋村） 二ツ森貝塚（七戸町） 餅ノ沢（鯉ヶ沢町）	円筒上層 a 式土器 円筒上層 b 式土器 円筒上層 c 式土器 円筒上層 d 式土器 円筒上層 e 式土器 大木式土器	他地域との活発な交易 大規模貝塚の形成 円筒土器文化の終焉
約4,000年前	代 後 期	葦窪（八戸市） 古野(3)（風間浦） 十腰内（弘前市） 猪ノ鼻(1)遺跡 米山(2)（青森市）	牛ヶ沢(3)式土器 十腰内Ⅰ式土器 十腰内Ⅱ式土器 十腰内Ⅲ式土器 十腰内Ⅳ式土器 十腰内Ⅴ式土器	十腰内文化の始まり 大規模環状列石の出現 石棺墓・甕棺墓など特殊葬制 祭祀遺構・遺物の多様化
約3,000年前	晩 期	川原平(1)（西目屋村） 大森勝山（弘前市） 是川中居（八戸市） 五月女菴（五所川原市） 亀ヶ岡（つがる市） 銅屋(1)（東通村）	大洞 B 式土器 大洞 B C 式土器 大洞 C1・C2 式土器 大洞 A・A' 式土器	亀ヶ岡文化の始まり 卓越した土器製作技法と豊富な器種 漆文化の発達
約2,000年前	弥生時代 前 中 後 期	砂沢（弘前市） 清水森西（弘前市） 垂柳（田舎館村） 板子塚（むつ市）	砂沢式土器 二枚橋式、五所式土器 田舎館式土器 天王山式土器	米づくりの始まり 遠賀川系土器 稲作と狩猟・採集の生活
（西暦250年頃）	古墳時代 前 中 後 期	猪ノ鼻(1)遺跡 森ヶ沢（七戸町） 田向冷水（八戸市） 市子林（八戸市）	土師器・須恵器 後北式・北大式	寒冷な時代 希少な遺跡数 かまど付き方形竪穴住居の構築 北方文化との強い結びつき
（西暦710年）	飛鳥時代 奈良時代	阿光坊古墳群（おいらせ町） 白蛇（八戸市） 猪ノ鼻(1)遺跡	土師器・須恵器	蝦夷の地、律令国家の支配地外 終末期古墳群の造営 馬産の開始
（西暦794年）	平安時代	猪ノ鼻(1)遺跡 五所川原須恵器窯跡群 （五所川原市） 竹鼻(3)（つがる市） 金堀沢（六ヶ所村） 猪ノ鼻(1)遺跡 高屋敷館（青森市）	土師器 須恵器 灰釉・緑釉陶器 擦文土器 かわらけ 陶磁器（中国産）	集落の急激な増加（集団移住？） 五所川原に日本最北の須恵器窯 塩・鉄関連遺跡の増加 十和田湖の噴火と降灰（915年頃） 白頭山の噴火と降灰（946年頃） 環壕集落や防衛性集落の出現 奥州藤原氏の支配
（西暦1185年）	鎌倉時代 室町時代	十三湊・福島城跡（五所川原市） 聖寿寺館（南部町） 猪ノ鼻(1)遺跡	珠洲・常滑・瀬戸 （国産） 青磁・白磁・染付 （中国産）	御家人の配置 安藤氏の繁栄と南部氏の台頭 他地域・国外との交易活発化 中世城館の構築
（西暦1590年）	安土桃山時代 江戸時代	三戸城（三戸町） 猪ノ鼻(1)遺跡 野脇・堀越城（弘前市） 弘前城（弘前市）	肥前陶磁器 小久慈焼（八戸領） 悪戸焼・下河原焼 （弘前領）	南部氏の支配と津軽氏の独立 盛岡藩・八戸藩・津軽藩の支配